

北の国のはなし

小川未明

青空文庫

あるところにぜいたくな人間が住んでいました。時節をかまわずに、なんでも食べたくなると、人々を方々に走らしてそれを求めたのであります。

「いくら金がかかってもいいから、さがしてこい。」と、その人はいいました。

ある日のこと、その人は、川魚が食べたいから、釣つてきてくれと、下男にいいつけました。

下男は当惑をしました。外を見ると真っ白に雪が積もっていました。どこを見ましても、一面に雪が地を隠していました。その村は、北の寒い国のさびしいところであったからであります。

しかし、いいだしたうえは、なんでもそのことを通す主人の氣質をよく知っていましたので、彼は、急に返事をせずに思案をしていました。

「なんで、そんなに考え込んでいるか。そのかわり、もしおまえが魚を釣ってきたら、お金をたくさんやる。またおまえのほしいというものはなんでもやろう。そうすれば、おまえは、家を持つて、こんどは主人になることができる。」と、主人はいいました。

下男は、そう聞くとまた喜ばずにはいられませんでした。お金をもらい、品物をもら

つて家を持つことができたなら、どんなにしあわせなことだろう。これが夏か、春か、秋のことであつたら、なんでもないこと、自分はそのしんで釣りをするだろう。ただ、いま時分のような冬であつては、どうすることもできない。しかし、できないことをするからこそ、そんなにほうびももらわれるのだと考えましたから、

「そんなら、釣りに出かけてきます。」と、下男は申しました。

「一匹でも釣れたら帰つてこい。釣れなければ帰つてきてはならぬぞ。」と、主人はいました。

下男は、いいつけをきいて家を出かけました。その前に、彼は、いまごろどこをほつてもみみずの見つからないことを知つていましたから、飯粒を餌にして釣る考えで、自分の食べる握り飯をその分に大きく造つて持つてゆきました。

小川は、みんな雪にうずまつていました。また池にもいっぱい雪が積もつていて、どこが田やら、圃やら、また流れであるやらわからなかつたほどであります。それに、寒さは強くて、水が凍つていました。

下男は、寒い風に吹かれながら、あちら、こちらをさまよつていましたが、やつと一筋の川らしいところに出ましたので、雪を分けて、わずかばかり現れている流れの上に

糸いとを垂たれていました。

「どうか、早く釣つれるように。」と、下男げなんは心こころで祈いのっていました。

そのとき、一羽わとりの鳥とが飛とんできて、あちらの森もりの中なかに降おりました。なに鳥どりだろうと、下男げなんはその方ほうを見みていると、ズドンといつて鉄砲てつぱうを打うつ音が聞きこえました。すると、さつき見たみた鳥とは飛とびあがって、今度こんどははるかかなたをさして飛とんでいってしまいました。だれか、打うちそこなつたのだなと思おもっていると、そこへ獵師りようしがやってきました。

「いまごろ、おまえさんは、なにを釣つっていないさるんだい。」と、獵師りようしはききましました。「なんとということはないに、釣つっているのです。」と、下男げなんは答こたえました。

「こんな川かわに、なにがいますもんか。もつと水みずの深ふかい、日ひ当たりのいいところではなくては、魚さかなも寄よつてきはしない。」と、獵師りようしはいいました。

下男げなんは、そうかと思おもいました。そこで糸いとを巻まいて獵師りようしの教おしえてくれたような川かわを探さがして歩あるきました。

すると、ある橋はしの際きわに、水みずの深ふかそうな、日ひの当あたるところがありました。そのときは、日ひがかげっていました。そこは天てん氣きならば、きつとよく日ひの当あたるところにちがいはりませんでした。

下男は、ここならだいじょうぶだと思つて、糸を下げていました。そして、一匹でも釣れたら急いで帰ろうと、そればかりを楽しみにしていましたから、寒いのもあまり感じなかったのでありました。

しばらくすると、ほおかぶりをして、えり巻きをした百姓が、その橋の上を通りかかりながら彼の釣りをしているのをながめました

「おまえさん、こんなところでなにが釣れるものかな。こんな川に魚などすんでいやしない。」と、百姓はいいました。

「ほんとうに、この川には、魚がないのですか。」と、下男は、百姓にききました。

「ああ、いやしない。」

「そんなら、どこへいったら釣れましようか。」と、下男は、絶望して問いました。

「それは俺にもわからないが、いま時分、釣りをするのがまちがっている。」と、百姓はいい残して、さっさといつてしまいました。

下男は絶望のあまり泣き出したくなりました。また糸を巻いて、そこからあてなく、すくすく歩きはじめました。

頼りなく思うと、じきに寒さが骨肉にしみこんできました。しかし、彼は、一匹でいい

から魚が釣れたときの空想して、もうそんな寒さなどは身に感じなかったのではありません。彼は見なれない人に出あいました。なんとなく、その人は、なんでもよく知っているように思われました。彼は、さつそく、その人にどの川へいつたら魚がすんでいるかをきいたのであります。

「おまえさんは、そんなことを人にきくのはむりというもんだ。考えてみるがいい。だれも目にもえないところにすんでいるものを、釣れるとか、釣れないとかいうことはできない。根気ひとつだ。釣れるまで待つているよりかしかたがない。」と、その見なれないようすをした人はいいました。下男は、なるほどそれにちがいないと考えました。

釣れなければ、主人のもとへは帰れないのだから、どこまでもひとつしんぼうをしてみようと思いました。

見なれない人は、ゆき過ぎましたが、振り返つて、

「冬は、川よりも池が釣れないのですか。私は、いつか池の魚をすくつている人を見たことがありますよ。」と、その人はいいました。

下男は、釣りについては、あまり知識がなかったものですから、そうきくと喜びました。そして、池をさがして歩きました。

やつと池をさがしあてると雪が一面に積もつて水をうずめていました。しかも寒さで、その上は凍っていました。

「ああ、ここでしんぼうをするんだ。」と、下男は思いました。そして、雪を分け、氷を破つて、そのすきまから、糸を垂れました。氷の下には蒼黒い水が顔を見せていました。いかにも深そうに思われたのであります。

彼は、そこにうずくまりました。いつしか雪の上に腰を下ろして、じつと暗い水の上にとだよつているうきを見つめていました。いまにもそれが動きはしないかと、そのときばかりを考えていました。

寒い風が空を吹いています。哀れな下男はいつしか疲れてうとうととなつたかと思うと、いつのまにか、短い冬の日が暮れてしまいました。彼は、夢とも現ともなくうとうととした気持ちになりました。

いくつも、いくつも魚が釣れた。なんとという自分は幸福なことだろう。頭の上には振りまいたように、金色の星や、銀色の星が輝いている。よく見ると、それは、みんな星ではなく、金貨に、銀貨に、宝石や、宝物の中に自分はすわっているのである。もう、こんなうれしいことはない。

彼は、りっぱな家を持って、その家の主人となっていました。

あくる日、木の枝でからすがなきました。ちようど彼の頭の上でなっていました。

けれど、彼は釣りざおを握ったままじつとしていました。雪の上に凍りついて、目はガラスのように光っていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1921（大正10）年4月

※表題は底本では、「北《きた》の国《くに》のはなし」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北の国のはなし

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>